京都文教大生による宇治商工会議所会員企業・団体紹介〔第 30 回〕

～社会人0年生の私たちが見つけた企業と地域の魅力～

2025 年 8

地域連携学生プロジェクト 商店街活性化隊しあわせ工房 CanVas × 樋口鉱泉株式会社

130 年の歴史をつなぎ、まちを元気にする自販機たち

宇治橋通り商店街と連携し、まちづくりに取り組む「商店街活性化隊しあわせ工房CanVas」が、自動販売機のオペレーションや管理を行う「樋口鉱泉株式会社」代表取締役社長 樋口 真一郎 氏を取材しました。

【私達の身近にある自動販売機を支える仕事】

樋口鉱泉では、社員1人1人が担当ルートを持ち、1人で1日に約20件ほどの自販機を回り、補充や清掃を行います。夏は喉が渇きやすくなるため、さらっとしたものや炭酸飲料が、冬は肌寒くなるため体を温めるものや腹持ちの良いものが売れる傾向にあります。「温」と「冷」の切り替えは「最低気温15℃」を目安にしており、15℃を超えると冷たいものが売れやすくなると伺いました。外回りの多い自販機のオペレーション業務は、暑さ寒さに耐えながら行う大変な業務ですが、利用する方から「ありがとう」と声をかけてもらえるなど、直接感謝の言葉をいただけることがやりがいに繋がっています。私達が普段利用する自動販売機の裏側や緻密さが分かり、奥深い仕事だと感じました。

【自動販売機への愛着と地元愛】

↑宇治橋通りにある「宇治茶」の自販機

ある日、自販機の設置を希望するお客様から電話がありました。その方は、どこの自販機を置くか迷っていましたが、樋口鉱泉の自販機がいつもキレイに保たれており、作業中のスタッフの対応も気持ちが良かった、ということで樋口鉱泉に決めたとのことです。日頃より、樋口鉱泉では「自販機は1つのショップ」という意識を持って取組んでいます。ショップ店員のように担当する自販機1台ずつに愛着を持って作業をしているからこそのエピソードを伺いました。樋口鉱泉の魅力のひとつに、顧客や地域との関わりの深さがあります。宇治市内を歩くと飲料メーカーのドリンクと共に、京都府茶協同組合の「碾茶入り宇治茶」と書かれている自販機をよく見かけます。通常、アサヒ飲料の自販機にはアサヒの商品しか入れることができませんが、樋口鉱泉は京都府茶協同組合と共に、アサヒ飲料に協力を求め、特別に許可を取っています。地域を盛り上げたい、宇治茶を広めたい、という樋口さんの想いが形になった自販機です。私たちCanVasのイベントでも、この自販機を探すミッションがあり参加者にも大好評でした。観光客の多い、中宇治エリアに多く設置されている「宇治茶の自販機」を探してみてください。

【職場づくりは人づくり】

↑ 本社での取材の様子

樋口鉱泉はアットホームな職場が築かれていました。社内では積極的にコミュニケーションがとられており、冗談を言い合うなどの姿も見られます。こうした職場環境から、社員さんが仕事を探している友人を会社に紹介し、入社するということもあった、と樋口社長は嬉しそうに話されました。今回の取材では、樋口鉱泉の環境・地域に根差した業務や良好な職場環境の秘訣をお聞きすることができました。今後は、重たいドリンクを運ぶことが困難になった年配の社員でも働き続けることができるように、ドリンク以外の軽い商品の自販機の展開も視野に入れ、スタッフが働きやすい職場づくりと地産地消に貢献するような業務を続けていくと話されました。

【今回の取材先】

樋口鉱泉株式会社

（宇治市槇島町目川170-2）

1890年3月創業、1950年2月に会社設立。2020年に創業130年を迎えた。現在、7代目の樋口 真一郎 氏が代表取締役社長を務める。京都府内を中心に、清涼飲料水卸売業および自動販売機オペレーション等を行う。現在、社員数は13名。

【今回の取材担当】

地域連携学生プロジェクト

商店街活性化隊

しあわせ工房CanVas

2014年設立。宇治橋通商店街振興組合の公認を受け、商店街の活性化に取組む学生団体。宇治橋通りの魅力を発信する事業の実施、情報紙の発行などを行う。現在、学部や学年を超えた25名で活動中。

今回取材、記事作成を担当した学生たち。京都文教大学の学内にある、樋口鉱泉の自販機と共に。左から岩田 彩奈さん（臨床心学部2年次生）、大橋 勇太さん（臨床心理学部3年次生）、青木 友和さん（総合社会学部1年次生）